特集 Feature articles

様々な音楽療法1（教育・療育）

音楽でつながる・ひろがる

三重大学助教授
根津知佳子

1　ベッドサイドでの臨床

三重県の山間部にある病院のベッドサイドでのセッションのことである。

『ふるさと』をセラピスト（筆者）が口ずさむと、「わしは、歌うのは好きじゃない。聴くのがいい。私の故郷は隣の村でな…。」とTさんは穏やかに目を閉じた。歩くことのできなくなったその足で、しっかり故郷の大地を踏みしめている姿を想いおこしていたのではないだろうか。その次の週に、静かにその人生の幕を閉じた。

遠くに見える山々を眺めるだけで、四季の移り変わりを肌で感じることができないベッドサイドの音楽の中でも、身体感覚や視覚的なイメージを伴って、様々な経験ができる。ことばにできない気持ちや、実現できない夢でも、音楽の中では叶えることができる。

また、Yさんの例。『オールドブラックジョー』が大好きで、初めは曲にあわせて大きな声を出して歌っていたが、何週か経った頃から涙を流しながら聴くようになった。この曲は息子さんが小学校四年生の頃の発表会で、ハーモニカーで演奏した曲とのことで、当時を想い出したようであった。

このように、音楽は、過ぎ去った時間も再現することができる。そして、喪失してしまった"者・物たち"と再び出会うことができる。人は、音楽によって、過去や未来を現在につないで統合できる"ちから"をもっている。まさに、"人間に与えられたちから"と"音楽の神秘性"を強く感じる日々である。

文字通り、"床に臨む"臨床現場で常に感じることは、食べることも、歩くことも、話すこともできなくなった方々でも、命のある限り音楽を欲していて、そのパワーによって生きていく力を生み出していることである。一人一人の身体に、形には残っていなくてもかけがえのない"音世界"がしみ込んでいて、音楽は、その人の人生をつなぐことができるのである。そして、それは、人と人とを結ぶこともできるのである。

2　三重大学における授業実践

三重大学教育学部音楽科では、様々な対象者を理解すること、音楽がもっている生理的・社会的・心理的作用を理解することを目的として『音楽療法概説』を必修科目としている。そして、『音楽療法演習』では、冒頭の病院のロビーでのコンサートを企画し、開催することを課題としている。

年末のコンサートでは、日頃、実技の練習に励んでいる学生達が、合唱や楽器演奏（ヴァイオリン、トーンチャイム合奏）などを自分たちなりに組み合わせ、三十分間のプログラムを考えた。手拍子する人、歌を聴いて昔話を始める人など自分たちの演奏が、ロビーに集まった

時（世代）を超えて、つながっていく（病院のロビーにて）

聴衆に確かに伝わっていることを感じながら、必死で表現をしている様子であった。（写真右）

突然聞こえる院内の放送、廊下を通り抜けていくベッド、点滴をつなぎながら主治医と共に座っている患者さん、車椅子で病室に戻ってしまう患者さん…様々な光景を目の当たりにしながら、自分たちの音楽が病院という空間に様々な影響を与えていること、同時に、その空間から自分たちも影響を受けながら演奏していることを感じたに違いない。

学生は、『上を向いて歩こう』が流行した時代も、坂本九も知らない世代である。何気なく選んだ曲であるにも関わらず、「上を向いて歩こう」というテーマが、看病で疲れているご家族に癒しをもたらしたこと、「ひとりぼっちの夜」という歌詞で、寂しさを思い出してしまった患者さんがいたことなどを体験し、音楽と人生との深い結びつきを学んだのではないかと思う。

授業では、三重大学附属養護学校や知的障害者の通所施設でのコンサートも行っている。介護等体験実習で関わった子ども達や対象者の方々と、あらためて"音楽の中で出会う"体験を通して、音楽は、人と人をつないでいく力を持っていることを学んでいるのではないだろうか。（写真下）

近年の音楽療法ブームにより、"音楽療法"は、量的にも質的にも変化している。生野里花氏は、日本の音楽療法の入門教育は、音楽療法士養成機関の設立や国家資格などプロとして

感じあい、響きあう（三重大学教育学部附属養護学校にて）

沈黙に耳を傾ける、そして動き出す瞬間

の水準を上げるという課題と、学習者の層の厚さを考慮しなければならない状況という一見矛盾している二つの課題に直面していると述べている。筆者は、音楽療法の裾野を広げながら、より高いレベルの実践を展開するためには、実践現場の職員や関係者の音楽療法に対する理解を深めることも課題であると考えて、これを第三の課題としている。

その一つが、将来教育現場に出て行く教育学部の学生への教育実践である。しかしながら、学生が音楽療法の理論や技法を学ぶことを求めているわけではない。人は、死ぬまで成長し続けること、音楽と共に在り続けることを理解してもらいたいと願っている。

人生を、第一期（二十一歳まで）、第二期（四十二歳まで）、第三期（四十二歳以降）に分ける立場では、第二期の終わりにかけて分岐点となり、それを境に"生物学的な発達"や"心理学的な発達"は衰えていくが、"スピリチュアルな発達"は、死を迎えるまで続くといわれている。村井靖児氏は、"同質の原理"について、他の芸術以上にその人のアイデンティティと関わる重要なものであることとして捉えているが、音楽こそが、その人の存在証明であるという視点は、現在の音楽療法や音楽教育の領域で最も論議されるべき点ではないかと考える。

3　知的障害者の通所更生施設での実践

「音楽的な経験が意味に満ちていて魅力であることがわかり、音楽を記憶し、何らかの形の音楽表現を享受するような、すべての子どもの中にある生まれつき備わった個性化された音楽性」を"Music Child（音楽的自己）"と名づけたのは、ノードフ・ロビンズ音楽療法の創始者である、クライブ・ロビンズとポール・ノードフである。

日頃、音楽療法や音楽教育の実践を通して、音楽的な経験が子どもや対象者の内面を変容させる力を持っていることを実感している方々は多いのではないだろうか。

愛情に満ちた家庭で育ったケンさんは、不快な体験をしたことがないため、生まれてから一度も声を出す必要がなかった。一体何を楽しく感じるのだろう、何を考えているのだろう、そんな施設の職員の疑問がきっかけで、ケンさんの内面を探ることを意図したセッションが開始されたのは、五年前のことである。セラピスト（筆者）は、ケンさんの反応をひたすら待ち、彼が動いたらピアノで応答することを繰り返した。（写真上）

そのうち、意図的に楽器と関わるようになり、セラピストが弾く音楽に対して納得がいかない時には、怒ったり、無視したりするようになっていった。あたかも三十年間眠っていた"意志"や"感情"が、少しずつ開いていくかのようであった。やがて音楽だけではなく、その変化は日常生活にも浸透していった。毎日を穏やかに過ごしていたケンさんの日常は、施設の職員や家族も巻き込んで、ドラマティックに変わっていった。

ケンさんは、時折「ウッ」と声を出す。会話はできないが、今では、音楽で対話することができる。「自分は、男なんだ。そんな静かな音楽

は嫌だ」、時折そんな太鼓を叩く。知的な障害があっても、今のケンさんは三十歳の男性として生の声と音を持っている。（写真下）

4　音楽教育へのねがい…

近年、音楽療法的な活動が様々な領域で繰り広げられている。大阪堺市の少年補導センターでは非行少年を対象とした"ロック塾"を開き、少年達の溢れる〈エネルギー〉を非行ではなく、音楽に向けさせるというユニークな試みをしている。少年たちは、最初は楽器で"発散"するだけだが、やがてバンドの中での自分の役割に責任を持ち、仲間と音で繋がっていくようになる。共感、達成感を味わった少年たちは、非行に戻ることはない。彼らの選ぶ音楽の歌詞を分析すると、こう在りたい自分や家族や学校への本音が見え隠れする。

また、不登校や摂食障害の思春期の少女とのセッションでは、子どもたちが生活の中で悩みながらも、自分や社会と向かい合って生きようと必死になっている姿が音になって表れてくる。

このように、言葉では言い表せない〈ことば＝音楽と沈黙〉に耳を傾けた時に、対象者の心の世界を感じることができるだけではなく、自分自身の心の世界にも気がつくのである。これが音楽療法の醍醐味ではないかと思う。それは、"ぎりぎりの世界"でもある。音楽は楽しい、という単純な感覚だけで対象者の世界に土足で入り込むことは危険である。例えば、前述した例にもあるように、一つの音・音楽がきっかけで、苦しいこと、嫌なことも思い出してしまうことがある。これに対しての責任を引き受けることができて、初めて音楽療法と呼べるのではないかと考える。子どもや対象者の成長を願いながら、一方でセラピスト（教師）としての自己も高めなければならない。音楽教育も同じことがいえるのではないだろうか。

乳幼児の言語発達や音楽の臨床、家族支援、児童期の自主グループ、成人の通所更生施設での療育、精神科領域の音楽療法、ベッドサイドでの音楽療法……音楽教育の近接関連領域での現場では、学校という空間での音楽が、いかに一人一人の人生に影響を与えているかを考えさせられる。先生、仲間、楽器がある教室。その空間で肌で感じたことが、一人一人の生活や人生にどれくらい"ひかり"を与えているのか、そして"ささえ"となっているのか……今後も、その声を実践現場から届ける役割をつとめたいと考えている。

いま・ここにいる確かな自分（たち）